

「死者の立憲主義」

中島岳志

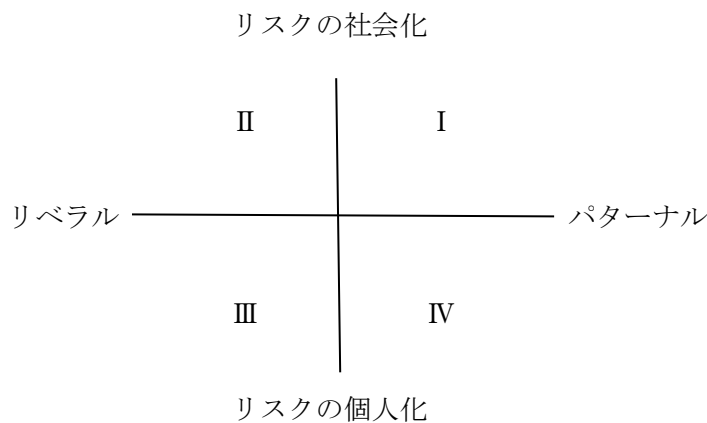
0. 政治のマトリクス

① 配分をめぐる軸…Y 軸

→セーフティーネット強化（リスクの社会化）vs 自己責任（リスクの個人化）

② 値をめぐる軸…X 軸

→リベラル（ハト派）vs パターナル（タカ派）



1. 死者と共に生きること

- ・「二人称の死」は「喪失」だけなのか？
 - 死者との出会い直し
 - 死者と交わす言葉／コトバ…意味の会話
 - ・「生者－生者」の関係と「生者－死者」の関係
 - ・死者と未来の他者
 - ・柳田国男『先祖の話』（1945 年）
 - ・南多摩群の丘陵地で「自分と同じ年輩の老人」と出会う
 - ・「この人がしきりに御先祖になるつもりだということをいった」
 - ・「それを死んだ後までの目標にして、後世子孫のために計画するということは、たとえ順境に恵まれて他の欲望がなくなったからだとしても、今時ちょっと類のない、古風なしかも穏健な心掛けだと私は感心した」
- ⇒憲法の機能

2. オルテガ『大衆の反逆』

- ・死者論としての『大衆の反逆』（オルテガ）
 - ・「われわれ現代の人間は、突然、地上にただひとり残されたと、つまり死者たちは死んだふりをしているのではなく、完全に死んでいるのだ、もうわれわれを助けてはくれない、と感ずる。（中略）すぐ隣に生きている死者もなく、ヨーロッパ人は孤独である」
 - 「孤独な群衆」（リースマン）
 - ・死者を殺した現代人…「いま」の至上化
 - ・トポスを欠いた「裸の個人」の群れ＝「大衆」
 - 多数者の専制
 - ・ジクムント・バウマン：「リキッド・モダニティ」（流動的近代）
 - ・「クローク型共同体」…不確実性、不安定性、安全性欠如
 - ・「瞬間的な感情の共有」と「スピード感」

3. 死者との協同作業としてのデモクラシー

- ・チェスタトン『正統とは何か』
 - ・「平凡の非凡」
 - ・「若いころから私には一度も理解できないことが一つある。民主主義は、どういうわけか伝統と対立すると人は言う。どこからこんな考えが出てきたのか、それが私にはどうしても理解できぬのだ。伝統とは、民主主義を時間の軸に沿って昔に押し広げたものにほかならぬではないか。（略）何か孤立した記録、偶然に選ばれた記録を信用するのではなく、過去の平凡な人間共通の輿論を信用す——それが伝統のはずである。」
 - ・「伝統とは選挙権の時間的拡大と定義してよろしいのである。伝統とは、あらゆる階級のうちもっとも陽の目を見ぬ階級、われらが祖先に投票権を与えることを意味するのである。死者の民主主義なのだ。単にたまたま生きて動いているというだけで、今の人間が投票権を独占するなどということは、生者の傲慢な寡頭政治以外の何物でもない。（中略）民主主義と伝統—この二つの観念は、少なくとも私には切っても切れぬものに見える。二つが同じ一つの観念であることは、私には自明のことと思えるのだ。われわれは死者を会議に招かねばならない。古代のギリシア人は石で投票したというが、死者には墓石で投票して貰わなければならない。」

4. 立憲民主主義へ

- ・立憲と民主の緊張関係
 - ・樋口陽一の憲法学
 - ・革命による憲法制定権力をどう見るのか？

- ・ 統治行為論
 - ・ 2015 年の安保法制成立
 - ・ 2017 年の立憲民主党成立
 - * 立憲民主主義の重要性
 - ・ 第九十七条：「この憲法が日本国民に保障する基本的人権は、人類の多年にわたる自由獲得の努力の成果であつて、これらの権利は、過去幾多の試練に堪へ、現在及び将来の国民に対し、侵すことのできない永久の権利として信託されたものである。」
- ⇒死者からの信託